地域文化としての「東三河カラオケ喫茶」

大　崎　　洋

1　はじめに

杉浦明平（1913-2001）[注1] の著書『農の情景 - 菊とメロンの岬から -』の「1 プラチナとカラオケ」[注2] には、渥美町に住む働き者の女性達が、夜 9 時過ぎ、家の片づけが終わるや、近所の女性達とさそい合い、足繁くカラオケ喫茶に通い、村のカラオケ大会では満足できず、40Km 離れた豊橋市まで夜道を車で飛ばし、カラオケ喫茶・カラオケスナックに足繁く通う姿が次のようにユーモラスに描かれている。

四十すぎて子育てもほぼ終わったころ、男にはバクチ、女買いをはじめあれやこれや遊びの道があるけれども、女の方は二十余年間働きに働きつづけて金を溜める以外に時間のつぶしようを知らない。地方の町や村の文化会ではやっているお茶やお花も習っていないし、書道も絵も和歌俳句とも縁がない。すすめられても、今さらそんなしおらしい遊芸に熱中することに慣れていない。けっきょくこういう働きもののおっかさんたちを魅惑するのはカラオケだけとなる。

体じゅうでたのしみたい働きもののおっかさんたちは、生ぬるい、ムラのカラオケ大会では満足できっこない。夜九時過ぎ家の片づけが終わるや、同好のおっかさんたちとさそい合い、豊橋市まで四十キロの夜道を車で飛ばす。町にも深夜営業のカラオケ喫茶がないではないけれど、豊橋くらいの大きな市で、日常には見知らぬ客で溢れるカラオケスナックでなくてはものたらぬそうだ

かの女たち、最初の店（昼は喫茶店だが、喫茶店は午後十一時閉店と県条例できまっているから午後八時以後は酒類営業のスナックバーに変貌している）の前に到着するや、車の中でトランクにしまってあったそれぞれのピカピカのイブニングドレスに着替えると、拍手喝采に迎えられてはでやかに店に繰り込む。

マイクの前に立つと、金歯やプラチナの歯をライトに光らせながら得意の曲を力いっぱい歌いまくる。

とある。

当時の状況をよく知る、カラオケ喫茶「りぴいと」[注3] のマスターから話を聞くと、杉浦明平はカラオケ喫茶に通うことはなかったが、カラオケ好きのいろいろな人の聞き取りから、この本を書いたそうである。ちなみに「りぴいと」はこの本の舞台となった田原市内のカラオケ喫茶の一軒である。2019 年 10 月 30 日現在、田原市内で、当時から営業している店は「リピート」のみとなっている。

一方、豊橋ではカラオケ喫茶「オンステージ」・「タモン」[注4] がその舞台となっている。両店は、現在でも営業している。

『農の情景 - 菊とメロンの岬 -』の発刊から31年経た現在、高齢となった人達が通うカラオケ喫茶の実状について、この本に登場する豊橋・田原、隣接する豊川の東三河3市のカラオケ喫茶25軒を訪問し、経営者（マスター・ママ）とそこに集うお客の実態を聞き取り調査し、カラオケ喫茶は地域文化（local culture）にどのような役割を果たしているのかを、地域文化としての「東三河カラオケ喫茶」をテーマに考察する。

2　調査方法及び調査範囲

2.1　調査方法

訪問調査において、事前にお店へ電話で訪問の趣旨を説明し、店側の了解をもらい訪問日時を決める。どのお店も共通して、お客さんが一番集まるのは土曜日である。

その日に調査に行きたいが、お店の都合による聞き取りなのでその指示に従う。

お店を訪問したら、終始、笑顔を絶やさないことを心がけ、500円でコーヒーを注文する。カラオケチケットを購入し順番がきたら、1曲しかない私の持ち歌、小林旭の「熱き心に」を堂々と歌う。下手である故に店内に強いインパクトを与えた後、経営者（マスター・ママ）そしてお客に話を聞くというスタイルをとった。

聞き取り項目は、経営者（マスター・ママ）には、①営業年数 ②営業時間 ③料金 ④お客の年齢層 ⑤お店を始めたきっかけ ⑥お店の自慢できるところ（ウリ）⑦お店をもってよかったこと ⑧経営者として苦労していること・困っていること、である。

お客には、①お店に通う理由 ②よく歌う曲 ③何歳頃からお店に通い始めたか ④移動手段 ⑤店に通う頻度（1週間での回数）⑥1回の滞在時間 ⑦1回に使うお金、である。

2.2　調査範囲

カラオケ喫茶と深い関係のあるカラオケサークルは調査外とし、訪問調査はカラオケ喫茶店に限定した。

3 「カラオケ喫茶」とは

カラオケは1970年代、「飲み屋（酒場）」で中年男性が演歌[注5]を歌う道具として開発され、日本で発祥した世界に誇る文化といえる。

人間は、老いも若きも全くの孤独には耐えられない。そこで登場したのがコミュニケーション（伝達）に挫折した人々にも可能な“コミュニオン（交感）”の場としてのカラオケである[注6]。もともと歌好きだった日本人に、自己陶酔をともなう自己表現の場を提供した。1990年代、平成に入り、通信カラオケDAMの登場により、急速に発展した。

カラオケ喫茶は、夜だけ営業するスナックとは違い、昼間からカラオケを歌いたい人たちが集う場所として、高齢者を中心に広がった喫茶店の一形態である。そこでは、演歌や歌謡曲[注7]を中心に歌われる。たまに洋曲を歌うお客さんがいる[注8]。

カラオケ喫茶の原型は「歌声喫茶」[注9]とされる。

カラオケ喫茶は35年～40年前が発祥とされ、中高年のカラオケ愛好家が主体で、歌う曲目も演歌・歌謡曲が多い。客が順番にカラオケを歌うという形式で、見ず知らずの人達が一緒に歌を楽しみ、近くに住む人達にとっては、歌を伴う井戸端会議でもある。

そして、歌唱力の鍛錬の場であるとともに地域の「演歌・歌謡曲情報基地」としての機能をもっている。昭和50年代から現在まで、実質的にはカラオケ喫茶が演歌・歌謡曲の牙城であり、各レコード会社が、演歌・歌謡曲歌手のキャンペーン先として必ずカラオケ喫

茶を入れている。それらの情報を掲載する歌謡情報誌 (注10) も存在し、カラオケ喫茶に通うお客のバイブルである。

若い人の特性は、SNS を利用し、見知らぬ人とあまり群れない、親しい人とつながるといった傾向があり、新曲は YouTube で覚え、カラオケボックスに通う。

一方、カラオケ喫茶は中高年わけても高齢者が中心であり、新曲はカラオケ喫茶で覚える。

写真 1　カラオケ喫茶の様子【筆者撮影】

4　東三河のカラオケ喫茶事情

4.1　全般

表 1･2 に「東三河のカラオケ喫茶の状況」、図 1 に「カラオケ喫茶 28 ケ所の分布図」にまとめた。

営業年数は令和元（2019）年 10 月 30 日現在である。

よく流行っているお店が共通していることは、①ゆったりした店内で、雰囲気がいいこと ②音響設備がいいこと ③ママの人柄がいいこと、があげられる。

4.2　特に印象に残ったカラオケ喫茶

(1)　豊橋市

「タモン」

60 名収容のゆったりした作りの店内であり、親子（母親がママ、息子がマスター）で経営、調理人のマスターが日替わりランチを提供している。土・日は 40 代～ 50 代の女性客（歌うのは演歌・歌謡曲でなく J ポップ）を取り込んでいる。店内の調度品も昭和ノスタルジーに溢れている。今後は、店側もオープンに若い人・ポップス系の曲を歌う人を呼び込む努力が必要であり、地域文化として生き残っていくための方向性を示しているお店と感じた。

営業年数 35 年であり『農の情景 - 菊とメロンの岬から -』の舞台となったお店である。

「せっちゃん」

熊本出身のママさんが、9 歳から 26 年間ブラジルで在住しており、5 年前豊橋市内のカラオケ大会で優勝後、お店を開いたという経歴であり、美空ひばりや演歌に強い思い入れがあり、お客さんもママに続き、演歌ファンが多い。

「加奈子」

元介護士のママが、定年退職後始めたお店。バリアフリーの構造で車椅子のお客も来店していた。包容力あるママの人柄で、初めてのお客にも温かく接してくれる。

P 版歌手 (注11) のキャンペーンを応援し、家族的雰囲気のお店である。

「若松」

豊橋の人気店の一つ。ゆったりとした店内でテーブルは舞台に向けて配置されている。

音響もよく、本年 10 月 28 日訪問した時も 20 人（ほとんど男女のペア）のお客で一杯であった。お客は豊橋・豊川・田原の人たちである。来店者へ、おにぎり 1 個のサービスは本当に嬉しい。

(2) 豊川市

「うぐいす」

内装（音響・舞台装置含む）を5千万円かけたということで、舞台の電動緞帳は5種類、スモークまであり、音響も素晴らしいお店であった。トイレが冷暖房完備で黄金の滝が見えるように作られており、庭師のマスターがお客さんのために贅を尽くしたという趣である。ここで歌う人は「祭り」に参加する感覚である。遠く浜松からのお客さんもいた。

カラオケ喫茶は中高年の「祭り」の場と捉えることができると思われた。

「もいちど」

特に印象に残るカラオケ喫茶であった。お店はサロン風であり、面倒見のいいママさんの人柄によるが、お店の雰囲気がよく、東名高速道路豊川ICから近い（約3km）ので、豊川・豊橋市内だけでなく、名古屋・浜松・田原からのお客さんがいる。客層は65～95歳、夫婦連れが多い。まさに、もいちど行きたいお店である。

(3)　田原市

「並樹」

マスターの渡辺昭美さんは歌謡講師を務め、並樹あきよしの芸名で「故郷の白い花／北の港町」というタイトルでCDを出しており、東三河歌謡界では有名人である。お店に通う人の最高齢は91歳、自ら運転をしてお店に通う。

赤羽文化会館での「歌楽うた祭り」はママが趣向を凝らした発表会であり、好評である。

「森久三」

元漁師、83歳のマスターの森下一久さんが営業する昭和時代にタイムスリップしたかのような店である。テーブルは舞台に面して教室型に配置されており、森下さん自身が5年前交通事故に遭遇し、その折の災難が田原警察署との縁となった。約30人が参加する3ヶ月毎に行う店内での歌謡祭後、警察官による交通安全や防犯（特に特殊詐欺など）の講話が行われている。ピンチがチャンスに変えた好例といえる。

4.3　訪問調査

(1) 経営者（マスター・ママ）への聞き取り

①営業年数

今回訪問した25軒の営業年数は、2～35年である。長く続いているお店は、人柄のいいママの存在が大きい。

②営業時間

一般的には、昼夜営業（12:00～17:00、19:00～23:00）であるが、最近はお客さんが高齢化し、半数は午前（7:00頃）～夕方（18:00）まで通しの営業に切り替えるお店が増えている。

③料金

ソフトドリンクは400円～600円でほとんどのお店が500円である。

カラオケチケットは、1冊10枚～11枚綴りで1000円であるが、1曲100円のお店もある。

④お客の年齢層

60～80代の男女（夫婦・友達）が中心である。平均年齢は後期高齢者の75歳である。

一部であるが90代で通う人もいる。

⑤お店を始めたきっかけ

「自分が歌が好きだから」、「定年退職後に何かをやりたかった」、「人から頼まれた」、「地域の人が集まる場所がほしかった」、「地域に関わりたかったから」など様々である。

お店の開始は「スナックから」、「喫茶店から」、「最初からカラオケ喫茶」、「歌謡講師をしていてレッスン場を改造した」などであった

⑥お店の自慢できるところ（ウリ）

「音響がいい」､「いいお客が集まっている」､「商売でなく商い」などであるが、半数以上のお店が「音響がいい」ことをあげている。

⑦お店を始めてよかったこと、

ほとんどの経営者が「多くの人との繋がりができた」と回答したが、中には「人嫌いだけど深入りしない付き合いができることが性格が自分にあっている」というママもいた。

⑧経営者として苦労していること、困っていること

苦労していることは、「お店の経営（特にカラオケリース代が約10万円は高い）」、「経営者に対する妬み」、「お店への不満」などである。

困っていることは､「お客同士のトラブル」､「マナー（営業開始時間）を守らないお客」､「認知症のお客がトイレを汚したり、水を流さない」､「清潔感のない人の入店」などであった。

(2) お客への聞き取り

①お店に通う理由

「自分と同世代で、同じ趣味の人達に出会える楽しみ」､「友達ができる」､「カラオケボックスでなく大勢の前で歌いたい」、「新曲を早く覚えて歌い自慢したい」、「演歌・歌謡曲に関する最新情報がはいる」、「店内でレッスンがある。（店主がカラオケ講師の場合）」、「地域の人と繋がっていたい」などである。

しかし、歌が上手なお客は他人から嫉妬され、嫌われがちという一面もあるそうだ。

②よく歌う曲

演歌・歌謡曲とも圧倒的に新曲が多い。

新曲は男女・年齢を問わず、競うように新曲が歌われている。新曲の覚え方は、1.歌謡講師から新曲レッスンを受ける。2.通信カラオケDAMの歌唱ガイドから。3.スマホを利用しYouTube から。4.プロ歌手の新曲キャンペーン時CDを購入し覚える、という回答であった。豊橋のカラオケ喫茶「ペリエ」(注12) では、80代後半の女性がスマホを自在に操り、YouTubeで歌を覚えていた姿は衝撃であった。

また「美空ひばり」の人気が未だに高く、彼女の魅力は低音～高音の音域の広さであり、とても真似できないところが、多くのカラオケファンを惹きつけている。75～85歳の女性を中心に、「乱れ髪」、「悲しい酒」、「裏町酒場」や「尾張の馬子唄」、「ひばりの木曽節」など多くの曲が歌われていた。

③何歳頃からお店に通い始めたか

ほとんど、還暦を迎えてからという回答であり、男性は定年になってから、女性は60歳からという回答であった。

④移動手段

カラオケ喫茶は音響に配慮し、公共交通機関から離れた所にあり、移動手段は私有車に乗り合わせてという回答が多いが、近所の人は自転車･徒歩、さらに高齢者はシニアカー、中には歩行器（通称コロコロ）で通う人もいた。

⑤店に通う頻度（1週間での回数）

行きつけのお店を2～3軒もち、1週間に1～2回の頻度でお店に通う人が多かった。

⑥1回の滞在時間

平均して1回の滞在時間は2～4時間であるが、中には5～6時間という人もいた。

⑦1回に使うお金。

平均して1000円位である。その内訳はソフトドリンク500円、カラオケチケットを1回で使うのは、平均して半分（5曲）位だそ

うである。

4.4　ご当地ソング (注 13)

(1) 豊橋市

「豊橋音頭」、「マツケンのええじゃないかⅡ」、「新・鬼祭り」、「新・豊橋とんとん唄」が豊橋市観光ソングとなっている。

葵司朗が歌う「豊橋の女（ひと）」は通信カラオケ DAM（配信 NO.6831-10）に配信されている。

(2) 豊川市

「豊川音頭」、「豊川観光音頭」、「手筒まつり恋歌」、「豊川穂の国おまつり音頭」、「みんなの豊川夢の街」が豊川市観光ソングとなっているが、通信カラオケ DAM には配信されていない。豊川市出身のロック歌手、辻幸平が「豊川いなりうどんの歌」（JOYSOUND に配信）を歌っているが、市内のカラオケ喫茶の映像は、すべて通信カラオケ DAM を使用しているので、カラオケ喫茶で歌うことはできないが、カラオケボックスで歌う人はいるそうである。

(3) 田原市

観光協会が中心となって「じゃん田原りん」、「伸びゆく田原」、「今日も陽がかがやく」（歌 : さとう宗幸）、「赤羽音頭」、「新田原音頭」（歌 : 橋幸夫）、「花と茨」（歌 : 井沢八郎）などを作成している。

3 市のご当地ソングで DAM に配信されているのは、「豊橋の女（ひと）」だけであり、カラオケ喫茶でも、この曲を歌う人がいた。

4.5　歌謡祭（カラオケ大会･カラオケ発表会）

歌謡祭（カラオケ大会・発表会）は、店内か、市・町の公共施設を使用して行われる。

店内での歌謡祭はほとんどのお店が 2 ケ月か 3 ケ月に 1 度、昼食付き（2000 円～ 3000 円）で開催している。

また、市・町の公共施設を使用して行われる歌謡祭は三河ではほぼ毎週のように開催されている。主催はカラオケ喫茶の経営者や、カラオケサークルの会主などである。カラオケ喫茶に通う人は、誘いあって近隣の市・町で開催される歌謡祭に参加している。60 代～ 90 代（女性がやや多い）の人達が集っている。三河ではほぼ毎月、市の公共施設やカラオケ喫茶のお店でのカラオケ大会（発表会）が開催され、大勢の歌う人、応援する人が参加する。

論者も 2 回程、豊橋市で開催された歌謡祭を見学したが、50 代後半～ 80 代の人が参加し、歌の優劣はともかく、まず、参加者の年齢を気にしない派手な衣装を身にまとい、スターになりきったパフォーマンスに驚かされた。ほとんどの参加者がカラオケ DAM に配信されている曲を歌っているが、中には自作の曲をギター片手に歌う人、歌う人のバックでタンゴを踊るペアー・数人での歌謡舞踊、P 版歌手のゲスト出演ありなど、もうお腹いっぱいといった、盛り沢山の 1 日であった。

（公社）豊川市文化協会が年 3 回発行する「豊川文化」や（公社）田原市文化協会が年 2 回発行する「たはら文化」は、多くのカラオケ喫茶に通う人が出場する、歌謡祭の模様について掲載されている。

4.6　地域のカラオケ情報誌

東三河をカバーするカラオケ情報誌は『歌謡スポット』と『カラオケ情報誌エース』である。

『歌謡スポット』は、豊川市に本社を置くカラオケ喫茶の情報を中心とした、地域の歌謡情報誌である。総業 16 年目、3000 部の発行で東三河・浜松エリアをカバーしている。

また、『カラオケ情報誌エース』の本社は知立市であり、総業 31 年、カラオケ情報誌としては、国内最大の発行部数 5 万部を誇る、

カラオケ喫茶情報を発信する新聞である。

同社社長の木戸一孝さんは、「20年前の入社当時と比べて、業界の衰退はあまり感じていない。歌謡曲に関心をもつ若い人や、人生の体験から演歌の歌詞のよさを見直す人が増えてきているように感じる。名古屋市や春日井市では30～40 代の女性がカラオケ喫茶で歌謡曲を歌っているのをよく見かける。そして、歌謡曲でCDを出したいという人が出てきており、その曲がDAMに入り、カラオケ喫茶でも歌うという流れが出てきつつある。それが東三河に伝搬していけば、カラオケ喫茶はまだまだ廃れることはない。そのお手伝いをしていきたい。」と言う。

5　遊びと祭りからみる「カラオケ喫茶」

5.1　遊び

『広辞苑』にあたって、「遊び」の項を引いてみると、①あそぶこと ②なぐさみ、遊戯の意味に加えて「(文学・芸術の理念として)人生から遊離した美の世界を求めること」とある。哲学者の丸山圭三郎（1933-1993）は「何らかの目的を達成する手段ではなく、自らのうちに快楽という目的をおく行為、すなわち目的と手段が分けられなくなっている行為が人間文化の特性だとすれば、音楽をはじめとする芸術、演劇、スポーツなどはその典型であるといえる。そして、カラオケ特有のカタルシス（浄化作用）は、自分が受け身の観客や聴衆であるばかりでなく、能動的な主役となって舞台に立つかのような錯覚をもつことによって、一層高められる。舞台に立つのであれば、何よりも“遊び”の本質を忘れてはならないだろう。」(注14) と述べている。

主として高齢者がカラオケ喫茶に通う楽しみも、有効性のみを求めて働いてきた日常の機能主義から脱するところにあるといえるのではないだろうか。

フランスの社会学者R.カイヨワ（1913-1978）は、遊びを「競争（スポーツなど）」、「偶然（ギャンブルなどの楽しみ）」、「模擬（歌うこと・演劇など）」、「めまい（スピードを楽しむ感覚）」の4種類に分類した。(注15)

カラオケ喫茶での遊びもカイヨワのいう「模擬」であり、歌う人は行きつけのお店を2～3軒もち、1週間に1～2回の頻度でお店に通い、1回の滞在時間は2～4時間、1回に3～6曲歌っている。料金はソフトドリンクが500円、カラオケチケットが10～11枚綴りで1000円である。お客さんのほとんどが年金生活者であるが、1回で概ね1000円なので、歌好きの「遊び」としては一般的に低価格といえる。

5.2　祭り

祭りは日本人の心のふるさとであり、憧れであり、賑わいであり、興奮である。

地域住民は祝祭の一時の賑わいに共属の証しを求め、町内結束のシンボルを見出そうとする。そこに生みだされる相互の一体感が地域の日常生活を支え続けた。都市の祭りは、町内の共同性をありのままに映し出す生活文化のかたちである(注16)。

祭りはもともと「神のいるイベント」であったが、「神のいる祭り」をさがすのは困難なほど従来の「祭り」では把握しきれないほど多様化してきた。

かつては地域（共同体）の祭りというとき、無条件に伝統的な地縁の祭りを指していたのに、現在では、地縁の祭りは様々な祭りのうちの一つにすぎないまでに衰退している。

論者の住む名古屋市北区においても、9年前までは各自治会の子ども会が中心となって御神輿を作り、毎年、10中旬に開催される学区内にある味鋺神社まで約2㎞の道を御神輿や獅子を先頭に練り歩いたが、本年（令和元年）では学区内37自治会のうち、味鋺神

社に参詣したのは10自治会と3分の1に減少している。

多様化する祭りであるが、カラオケ喫茶で歌うこと、歌謡祭に集うことは、高齢者にとってカラオケの祭典、すなわち「祭り」の場と捉えることができる。豊川市郊外にある、カラオケ喫茶「うぐいす」(注17)は内装（音響・舞台装置含む）を5千万円かけたということで、舞台の電動緞帳は5種類、スモークまであり、庭師のマスターがお客さんに喜んでもらうために丹精こめて作ったお店であり、ここで歌う人は「祭り」に参加する感覚である。

6　地域文化としての「カラオケ喫茶」

地域文化は、本来、気候・風土・地形・方言など一定の地域範囲内において共通して見られる文化であり、中核となっているのは民俗文化（folk culture）と呼ばれる伝統芸能である。

しかし、日本においてもまた世界的にも20世紀中に急激に進行した都市化（urbanize）によって農村などの民俗文化は次第に衰退し、また都市の中の地域文化も大衆文化（popular culture）の影響によって画一化や均質化、流行現象の波を被っている(注18)。

戦後の高度経済成長を背景として新中間層としてのサラリーマン家族を中心とした大都市生活が典型的な地域生活像になっていくに従って、地域文化も変容してきた。豊橋・豊川・田原とて例外ではない。

杉浦明平は「東海地方の文化」と題した1988年の講演の中で「名古屋を含めて地方資本とその営む文化なるものが東京の出店でないまでも、東京文化に呑み込まれてゆく。なかなか地方独自の文化を創ることはむつかしい。地方文化もますます東京化するが、消滅するわけではない」(注19)と述べている。

行政合併や制度的統廃合により、固有の地域文化は失われつつあるといえるが、カラオケ喫茶は、そのお店の客であること〈意識〉、カラオケ喫茶を拠点に歌謡祭会場に集い〈親睦〉、歌謡祭においてのカラオケ喫茶関係者の運営・進行〈分担〉そしてカラオケの祭典〈祭り〉の〈意識〉、〈親睦〉、〈分担〉、〈祭り〉は、まさに地域文化を形成するキーワードである。

7　おわりに

経済生活は人の生にとってリアルなものであり、極めて重要なファクターである。

リアルなものとは、経済生活だけにとどまらず、すぐに見えない文化的なもののなかにも 存在し、むしろその方が人の生にとって決定的といえる。今回の訪問調査により、高齢者にとって、カラオケ喫茶に通うことは、生きがいであり、希望であり、幸福であると実感した。

カラオケ喫茶が地域文化として生き続けていくには、カラオケ喫茶と関係の深い、カラオケサークルとの連携を強めることと、カラオケ喫茶のチケットを他店でも使えるような共通券化の実現などが必要と思われる。

そして、若い人の取り込みが不可欠である。豊橋市の「タモン」の様にランチを主体に歌う若い人を呼び込んだり、カラオケ喫茶はライブハウスとしての機能を備えているので、休業日や夜間に若い人が利用するライブを開催したりすることなどが今後必要と思われる。

音楽に貴賤はない。クラッシクが上で演歌・歌謡曲が下ということもない。歌は時代のメッセージである(注20)。カラオケで歌うことは健康にも、老化防止にもいいことは医学的にも証明されている。

カラオケ喫茶は地域の人が集い、歌謡曲や

演歌を歌う地域の文化資源として重要な位置づけにあるといえる。

今後の研究課題として、調査範囲を広げ、名古屋市周辺をはじめとする尾張地区のカラオケ喫茶を訪問し、カラオケ喫茶における尾張と三河の地域文化を比較・考察していきたい。

付記

1 本研究は、愛知大学綜合郷土研究所研究費による研究成果である。ここに記して関係各位に謝意を表します。
2 本稿作成にあたり豊川市在住の『歌声すぎゆき』の著者、平田超人様、田原市のカラオケ喫茶「並樹」の経営者渡辺昭美様他カラオケ喫茶関係者皆様の取材協力ならびに掲載を承諾していただき、御礼申し上げます。

注記

(1) 大正2(1913)年6月9日、愛知県渥美郡福江町(現田原市折立町)生まれ。豊橋中学、第一高等学校、東京帝国大学文学科と進み、立原道造や寺田透らと同人誌などを創刊した。第2次世界大戦中、郷里に戻り、昭和30(1955)年から渥美町会議員を務め、その間の見聞を元に、海苔養殖の利権争いを『ノリソダ騒動記』で発表、その後も共産党員の活動記録『基地六〇五号』、映画化もされた『台風一三号始末記』、『夜逃げ町長』などのルポタージュ記録文学が評判になり、注目を集めた。昭和37(1962)年に共産党から離れた後は、畑仕事にいそしみながら、郷土の渡辺崋山をはじめとした江戸時代の文人を取りあげた小説や評論、食べ物エッセイ、翻訳などの多分野で活躍。昭和46(1971)年に『小説渡辺崋山』で毎日出版文化賞、昭和52(1977)年に中日文化賞、平成7(1995)年に『ミケランジェロの手紙』翻訳で日本翻訳出版文化賞の特別功労賞を受賞。平成13(2001)年3月14日永眠、87歳。

(2) 岩波新書 1988 p39-44

(3) 表2「東三河のカラオケ喫茶の状況(2)」の㉘

(4) 表1「東三河のカラオケ喫茶の状況(1)」の③・⑦

(5) 石川弘義編『大衆文化事典』弘文堂 1994 p83-84
日本の大衆音楽の一分野。明治10年代、自由民権運動を宣伝するための民謡歌謡が起源だが、明治20(1888)年久田鬼石が青年倶楽部(演歌壮士団)を結成した頃から、歌による演説という意味での演歌という言葉が生まれた。

(6) 丸山圭三郎『人はなぜ歌うのか』飛鳥新社 1991 p163

(7) 前掲(5) p159-160
一般に、日本で作られた大衆歌曲をさす。芸術的な感興よりも、流行することを目的に作られたもの。この言葉はNHK放送がはじまったときに考案されたとするのが通説である。概念としては曖昧であり、演歌とポップスの中間に位置する。

(8) https://www.kissa-kaigyo.com

(9) https//kotobank,jp,word 、前掲(5) p162
1950年代に流行した、ピアノやアコーディオンを伴う伴奏に、客がリクエストした唱歌やフォークソングなどを客が全員で歌う喫茶店。東京新宿の「灯び」が発祥とされる。労働運動、安保闘争などを背景として生まれた歌の数々が歌声喫茶で歌われた。集団就職で都会に出てきた若者たちの孤独を癒す場ともなった。その後全国に広がり、60年代末ごろまではやったが、安保闘争の挫折、趣味の多様化、テレビの普及などで廃れ、70年代カラオケの出現により全国に広がった店も次々と閉店した。平成10(1998)年から静かなブームが復活した。

(10) カラオケ喫茶に関する月刊誌は『歌の手帖』、『カラオケファン』があり、東海地区を中心とする歌謡情報誌には『歌謡スポット』、『歌謡情報誌エース』がある。

(11) プライベート版歌手、地域密着型歌手のこと。

(12) 表 1「東三河のカラオケ喫茶の状況（1)」の⑪
(13) その土地に関わりがあり、人々に親しまれ、時代を反映する歌である。
(14) 前掲（6）p181
(15) R. カイヨワ『遊びと人間』岩波書店 1994 p19-26
(16) 松平誠『祭の文化 - 都市がつくる生活文化のかたち』有斐閣選書 1983 p1-8
(17) 表 2「東三河のカラオケ喫茶の状況（2)」の⑰
(18) 地域社会学会編『キーワード地域社会学』ハーベスト社 2011 p270
(19) 愛知女子短期大学付属東海地域文化研究所編『東海地域文化の諸問題』不二出版 1994 p21-22 1988 年 10 月 15 日 愛知女子短期大学講演での講演から
(20) 平田超人『歌声すぎゆき』展望社 2013 p1

参考文献

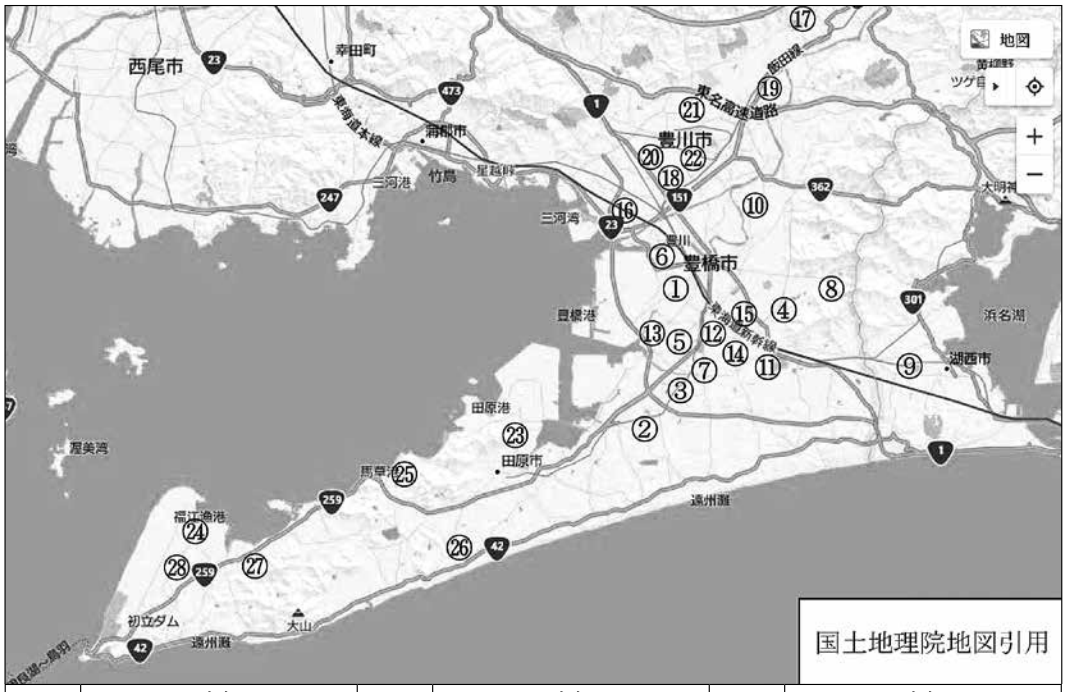
・天沢退二郎編『ユリイカ 歌謡曲』青土社 1999
・磯前順一『昭和・平成精神史』講談社選書メチエ 2019
・上田和男編『民俗調査ハンドブック』吉川弘文館 1987
・内山節『地域の作法から』農文協 2006
・演歌ルネサンスの会編『演歌は不滅だ』ソニー・マガジンズ 2008
・加太こうじ『歌の昭和史』時事通信社 1975
・加藤和也『美空ひばり公式完全データブック』角川書店 2011
・菊池清麿『昭和演歌の歴史 - その群像と時代 -』アルファベータブックス 2016
・菊池清麿『日本流行歌変遷史 - 歌謡曲の誕生から J ポップの時代へ -』論創社 2008
・木下英治『美空ひばり - 時代を歌う -』新潮社 1989
・高護『歌謡曲 - 時代を彩った歌たち -』岩波新書 2011
・佐藤郁哉『フィールドワーク』新曜社 1992
・塩澤実信『昭和の流行歌物語』展望社 2011
・滋賀県立大学環境フィールドワーク研究会『フィールドワーク心得町』サンライズ出版 2015
・嶋田豊『大衆文化の思想』萌文社 2000
・JASRAC 創立 75 周年記念事業実行委員会『うたのチカラ』集英社 2014
・新藤謙『大衆芸能論ノート』無明舎出版 1985
・関川夏央編『思想の科学 カラオケは世界のかたちを変える』思想の科学社 1994
・田辺明雄『日本の歌謡曲』講談社 1981
・谷口功一 スナック研究会編 『スナック研究序説 日本の夜の公共圏』白水社 2017
・田原市（政策推進部広報秘書課）『たはら歴史探訪クラブ』共和印刷 2012
・地方史研究協議会編『地方文化の伝統と創造』雄山閣 1976
・鶴見俊輔『戦後日本の大衆文化史 1945~1980 年』岩波現代文庫 2001
・長田暁二『昭和歌謡 - 流行歌からみえてくる昭和の世相 -』敬文社 2017
・中藤康俊『地域社会の変動と文化』大学教育出版 2011
・なかにし礼『歌謡曲から「昭和」を読む』NHK 出版新書 2011
・畑中章宏『21 世紀の民俗学』角川書店 2017
・福田アジオ『現代日本の民俗学』吉川弘文館 2014
・宮本常一『宮本常一著作集 1 民俗学への道』未来社 1968
・山本阿母里編『ジュリスト総合特集 日本の大衆文化』有斐閣 1980
・吉見俊哉『現代文化論』有斐閣アルマ 2018

表1　東三河のカラオケ喫茶の状況（1）

所在地		店　名	営業年数	特　徴
豊橋市	堂坂町 3	①エンゼル	30	ソフトドリンクは店内の自動販売機で購入、席料は 500 円、女性客が多い。夜はスナック
	南大清水町富士見 868-3	②音	16	マスターは弁当屋経営から転身、家庭的雰囲気で近所に住む女性客に人気
	植田町上り戸 53-1	③オンステージ	34	『農の情景』の舞台となった豊橋カラオケ喫茶、夜はスナックで 50 代のお客が中心
	西岩田 5-9-5	④加奈子	7	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	草間町平東 130	⑤すずめの学校	7	ママは 61 歳まで事務員、スーパーマーケットの傍にあり、70 代の客を中心に賑わう
	小向町北向 127-6	⑥せっちゃん	3	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	上野町新上野 29-4	⑦タモン	35	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	多米中町 2-14-10	⑧バラード	14	夜の世界に生きてきたママの雰囲気そのもののお店、店内では女性歌謡講師が指導
	雲谷町ノナカ 103-3	⑨ひだまり	15	市中心部から離れており、自宅を改造「私語は小さく拍手は大きく」がお店のモットー
	森岡町 21-4	⑩フレンズ	20	豊橋の老舗カラオケ喫茶、ママの人柄でお客さんが集まっているという印象を受けた
	浜道通新桜 83-4	⑪ペリエ	20	お店は普通の喫茶店からスタート、70 代男性客が多い、美空ひばりを歌う女性客多し
	牧野町 215	⑫ポエム	14	近所の人たちが集う、落ち着いた昭和ノスタルジーが漂うお店、歌手のキャンペーンあり
	駒形町下田 93-1	⑬渚	7	お茶のサービスあり、1曲歌い終わるごとにママがマイクをおしぼりで拭くのが印象的
	曙町若松 25-19	⑭夢	20	高齢のママが経営、80 歳前後の徒歩 (歩行器) で通う人がお客、地域のコミュニティを形成
	佐藤 3-19-17	⑮若松	30	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照

表2　東三河のカラオケ喫茶の状況（2）

所在地		店　名	営業年数	特　徴
豊川市	伊奈町宮前 41	⑯青山	19	マスター自身が歌手・歌謡講師であり、お客さんの歌唱レベルがやや高いように感じられた
	東上町柿木通 2-1	⑰うぐいす	2	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	宿町青木 97	⑱輝	22	ママの丁寧な応対、70 代の近所の人を中心としたお客、「拍手は惜しみなくお喋りは小声で」
	一宮町幸 18	⑲ここ	10	古いタイプのお店であるが、ママさんの人柄のよさで、東栄町や浜北市から通う人もいる
	蔵子 6-6-6	⑳まゆら	3	ママが貸衣装とブティックを経営しており、おしゃれなシルバー女性の社交場という雰囲気
	大崎町下金居場 192	㉑もいちど	21	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	中部町 2-41-1	㉒夢	7	朝6時からの営業、マスターが歌謡講師をしており、お客の歌のレベルは高い
田原市	田原町新清谷 106	㉓青い山	16	夜の飲食業 36 年のママ、お店はスナックからスタート、70 代を中心とした近所のお客中心
	福江町天神 30-5	㉔あかり	4	新築、広々とした店内･音響設備もいい。近所の 60 ～ 70 代の女性客が中心、夜はスナック
	野田町栗喰 8	㉕園	15	営業当初はカラオケ喫茶であるが、3年前から昼間営業をやめ、スナックのみの営業
	高松町縄口 87-1	㉖並樹	20	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	古田町郷中 200-4	㉗森久三	14	「4.2 特に印象に残ったカラオケ喫茶」参照
	亀山町草刈場 23	㉘りぴいと	34	『農の情景』の舞台、40 名収容のゆったりした店内、70 ～ 80 代のお客が中心、新曲ばかり歌う



NO	店名	NO	店名	NO	店名
①	エンゼル	⑪	ペリエ	㉑	もいちど
②	音	⑫	ポエム	㉒	夢
③	オンステージ	⑬	渚	㉓	青い山
④	加奈子	⑭	夢	㉔	あかり
⑤	すずめの学校	⑮	若松	㉕	園
⑥	せっちゃん	⑯	青山	㉖	並樹
⑦	タモン	⑰	うぐいす	㉗	森久三
⑧	バラード	⑱	輝	㉘	りぴいと
⑨	ひだまり	⑲	ここ		
⑩	フレンズ	⑳	まゆら		

図１　カラオケ喫茶 28 ケ所の分布図（番号は表３と対応している）